男をついに殺した。父を殺した男だった。

男の胸には深々と根元までナイフが突き刺さっている。私が突き刺したナイフだ。そして父が愛用していたものでもあった。喜びの声は出なかった。自分がどのような反応をするのか想像していたわけではなかったが、興味があった。やはり、と思った。

私にとって父はひだまりのような存在だ。過去形ではなく今でもなおそうなのは、父が同じように殺されて以後、冷たく固い暗がりの中で過ごしてきたためだ。その日々が長くなれば長くなるほど、父のあたたかさにより焦がれた。決して届かないものに、焦がれた。

終わって気付く。その日々は死ぬまで続くらしい。

「……ふぅ」

本当はすぐに火を着けてその場をすぐに去るつもりだった。しかし、これからも暗がりの日々が続くらしいと思うとなんだかその気が失せてしまった。妙に冷静になってしまった。

男の死体を仰向けに放置したまま、男が直前まで座っていた書斎の上をなんとなく見る。机の上には多くの書類や本が散乱している。その中から、年季の入った一冊の本を手に取った。本は他にもあったが、紙に埋もれるそれが妙に気になった。

「なんだろう」

題名も書いていない真っ黒な本をパラパラとめくる。それは日記だった。先頭のページには『ルーア歴一〇五年一〇月一一日～』と書かれている。昨年から書いているらしい。書き始めた日時が中途半端なのは、おそらくこの日記は何冊目かだからだろう。

急いでその場を去らなければならないことはわかっていたが、気になった。もう死んだ男の日々に、興味が湧いた。いや、ちがう。私は解っている。私は、今まで男のことを必要以上に知ることを避けてきていた。なにか男の良いところを知ってしまえば、殺害を躊躇してしまうかもしれない、父を裏切ってしまうかもしれない、と感じていたから。

そうなる可能性が万が一にも無くなった今、知らないままでいる必要はない。

その晩、浴びるほどに酒を飲んだ。町に戻った直後から町が眠るまでの間、常に酒を飲み続けた。元より酒への耐性は強い方だったが、今日は異常だった。飲まなければやっていられなかった。そうは思っても店は閉まってしまう。

俺は何も言わずに店を出て、通りには向かわなかった。何がいるのかわからない裏路地に入った。この町は栄えているが、その分だけ闇は深そうだった。深みへと進んだ。

汚れるのもに気にせず、壁に背を擦り付けながら地べたに座った。空を仰ぎ見ると星が輝いていた。地獄の底から天井を眺めているような気分になった。

殺した男はたしかに殺し屋だった。しかしそれはかつての話で、かつての男が殺していたのは悪人と呼ぶに相応しい人間だけだった。そして男は、殺してきた面々が悪人だと理解していながら罪の意識に苛まれてしまうような、愚かな人間だった。俺は、底から空を見る。